

「求め、選び取っていく聖霊の満たし」

エペソ人への手紙 5：17－21

May.18.2025

エペソ人への手紙 5：17－21 (パウロ)

Preface

前回、同じ聖書箇所から、神様の主権と恵みゆえに与えられ、受ける、所謂特異な体験のようにも見える聖霊の満たし以上に、キリストを信じるキリスト者自身の意志をもって求め、選び取っていく、私たちの日々の暮らしの中に現れる品性としての聖霊の満たしの重要性について考えていきました。

突如として主の摂理の中で聖霊に満たされ、異言を語ったり、預言をしたりする摩訶不思議な聖霊体験も、神様がお与え下さる祝福として大切な信仰体験だと思いますが、このエペソ書 5 章から 6 章にかけて使徒パウロ先生が語っている聖霊の満たしは、私たちの日常生活の中に現れる表す、私たち側の意志や姿勢が求められる聖霊の満たしです。

即ち、人と人との関係の中に表れる聖霊の満たし、自分以外の他者とのつながりややり取りに現れる聖霊の満たしです。

「人の人生は、それすべて人間関係だ」とも言えるように思いますが、聖書は意外にも、摩訶不思議なスピリチュアル体験のような聖霊の満たしよりも、それ以上に、人生という現場におけるありとあらゆる人間関係、特に、どこか遠くにいるいくらでも想像や妄想を広げ、思いを馳せることが出来る遠くの人との人間関係ではなく、今すぐ近くにいるその人、私の隣り人、目の前にいる人との人間関係の中に表れる、人同士の生々しいやり取りの中に体現される聖霊の満たしを大切にしているように思います。

Part One

なぜ戦争が無くならないのか？

誰もが持つ疑問だと思いますが、聖書が語るその理由は、意外に単純明快な気が致します。

近くの人との関係よりも、直ぐには接近出来ない遠くの人との関係に思いを馳せてしまうから。

「遠くのことや遠くの人のことには気を向けようとするけれども、今すぐ近くにいるその人には気がいかない、気を使おうとはしないからなんだ」と言わんばかりに、神様は、イエス様は、人間という限界あるお姿をとってこの地上に来られました。

2000年前という限定的な時代に、パレスチナのベツレヘムという限定的な町に、赤ん坊という母親と父親の懷に抱かれなければ生きられない限界のあ

る存在としてお生まれになりました。

そして、その後の30年間の歩みも、ガリラヤからユダヤまでという限定的な地域において、限定的に出会う人々との関係の中に、ご自身がメシア・キリストであることをお示しになりました。

つまり、目の前にいる人を、直ぐ近くにいる人を、手を伸ばせると直ぐに触れることの出来る人を大切に、その人々との関係の中に聖霊の満たしによる神の国を体現されました。

イエス様が十字架に架けられ、死なれ、復活し、天に上られた後に、私たちに望んで下さる聖霊様は、イエス様と違い、人間という限界のある存在としてではなく、霊という限界のないお姿のまま、この地に、人の上に臨んでくださいましたが、その聖霊様の満たしを受け、求める人たちに神様が要求し、期待されていることは、直ぐ近くにいる人、目の前にいる人、手の届く範囲にいる人たちとの関係の中に現れる聖霊の満たし、聖霊の満たしによって体現しようとする神の国です。

「あなたがたは聖霊を受け、あなた方が互いに愛し合うのを見たならば、世はあなたがたがわたしの弟子であることを知るでしょう」と仰ったイエス様のお言葉通りです。

今近くにいるその人とのその小さな葛藤が、大きな戦争となってこの世界に膨大なうねりのように現れているということを、私たち人間一人一人は中々認めたくないように思います。

「ブラジルで蝶が羽ばたくと、アメリカのテキサスで竜巻が起こる」というバタフライ（効果）エフェクトは、私たちの罪、霊的問題においてもそのまま当てはまることのように思えます。

聖書が大切にしていること、聖書が教えてくれる聖霊の働きは、今すぐ近くにいる人の中に現れ、表すものと教えて下さいます。

夫だったり、妻だったり、子だったり、親だったり、兄弟だったり、同僚だったり、先輩だったり、後輩だったり、友人だったり、今すぐ近くにいるその人との関係の中にあって現れる聖霊の満たし。

その表情や行いや態度や姿勢に表れる聖霊の満たしを求め、選び取って行くよう、聖書は私たちに語り掛けています。

そしてその語り掛けが、今読みました聖書箇所エペソ書5：18，21の「御霊に満たされなさい。キリストを恐れて、互いに従い合いなさい」という言葉に集約されているように思います。

今朝は、この御言葉を先週の内容からもう一步深く探るために、一人の反面教師を例に挙げて考えていきたいと思います。

その反面教師は、聖霊に満たされるという不思議なスピリチュアル体験はしたけれども、「キリストを恐れて、互いに従い合う」という人間関係の中に表

す現れる、神がお喜びになって下さる聖霊の満たしは求めなかった人でした。

Part One

現在、早天祈祷会で民数記を学んでおり、また先月お配りした聖書通読表に合わせて読んでいます聖書箇所も民数記ですが、その民数記の中に、バラムという一人の占い師・呪術師が登場してきます。

このバラムという人は、3500年前当時の中東世界において、名の通った有名な占い師・呪術師だったようですが、そんな彼を、土地もなく、国もなく、集団ホームレス状態のようだった流浪の民イスラエル民族を、なぜだか恐れ怯えたモアブ人の王バラクという人が、大枚をはたいて雇い入れようとし、イスラエル民族をのろい殺すように依頼をします。

占い師バラムは、しめしめとその依頼を引き受けるのですが、イスラエル民族を「宝の民だ」とご自身の命に代えるほどに愛しておられた主なる神様は、メシア・キリストを信じるクリスチャンでもなく、却って、まことの神の教えに反する占いや呪術や宗教儀式などをもって人の心を惑わせ掌握し、生計を立てているこの占い師バラムに直接現れなさって、直接言葉をお掛けになりながら、「決して、イスラエル民族に危害を加えてはならない。のろうような言葉、ひと言さえも掛けてはいけない」とお告げになるんです。

どうお告げになったかと言いますと、

民数記 22：12（パワポ）

天地万物をお造りになられた唯一の神であられる主が、直接占い師バラムに現れなさって語り掛けて下さいました。

「イスラエルの民たちをのろってはいけない。彼らは、私の愛する祝福された民だから」と、バラムは、ある意味とても不思議な神体験をします。

神を、主イエス様を信じる人ならば誰でも、一度ばかりか、または何度も、「神の声を直接聞きたい。神が目の前に現れてくださったらどれだけ分かりやすいし、良いだろうか。こんなもどかしい思いはしなくても済むだろうし、信仰においても、迷いが無くなることだろう」と思い、思っただけで来たのではないでしょう。

で、この占い師バラムは、唯一まことの三位一体なる神を信じているわけでもなく、「救い主イエス様の十字架を自分の身代わりだ」と告白しているわけでもないのに、なぜだか神さまは、神を信じるクリスチャンたちが強く望んでも願っても、一生に一度あるかないかの直接的な神の語り掛け、お言葉、お告げを数日のうちに何度も体験するんです。

この22：12以降も、神様はバラムに直接現れなさって、直接言葉をお語りになります。

しかも、しかもです。
神の霊、聖霊までが、彼の上に臨むんです。

民数記 24 : 2 (パワポ)

神の霊までが、占い師バラムの上に臨むんです。
ある意味何と羨ましい、物凄い神体験をバラムはするんです。
でもしかし、この聖霊体験が、神体験が、バラムの生き様を変えることはありませんでした。

この神体験、聖霊体験をもって、バラムがバラム自身、唯一まことの神の前に遡り、自分が神に反する、神が願っておられることとは真逆のことをしながら生計を立て、生活してきたことを悔いて、改めて、自らの罪深さを告白しながら、赦しを乞い、人をのろう稼業から足を洗って、主の名によって、主イエス・キリストを愛するように人を愛し、人を自分よりもすぐれた者と思い、神が我が内で生きるために自分を否定し、自分に死に、聖霊の満たしを求めながら、「私が死んだ時、聖霊が生きる。自我に死んだ時、聖霊が生きる」という前回お話ししましたアンドリュー・マーレーが言った聖霊のお働きを、その日々の生活の中で、人との関係の中で、その目の前にいる人との関係の中に、体現しようとは露も思いませんでした。

人をのろい、勝ち負けをつけ、優劣を決め合いながら、正しいのか間違っているのかを争う暴力的で、空しい、殺伐とした生々しい人間関係の中に表す現れる聖霊の満たしという生き様を神に求め、人に仕えるという生き方を選び取ろうとはしませんでした。

摩訶不思議なかたちで、また肉眼で見ることの出来るかたちで、聖霊に満たされるという体験までしたのに、「キリストを恐れて、互いに従い合う」という聖霊のお働きを意志をもって求め、選び取って行きながら、キリストを覚えつつ、他の誰かではなく、自分自身の罪深さを悟って、告白して、自分に死に人に従うという栄光ある、真の喜び、平安の生き方を選び取ろうとはしませんでした。

自分を否定し、自分に死に、我が内にキリストが生きるという喜びを味わうこともなく、聖霊なる神様が我が内で働いて下さるために自我に死ぬという、光栄なる選択を選び取って行くことはありませんでした。

せっかくの神体験が、何の御霊の実も生みませんでした。

そうして、民数記 24 : 25。

民数記 24 : 25 (パワポ)

バラムは、聖霊に満たされるという神体験をしてもなお、神ではなく、自分を選び取って行くという「自分のところへと帰って行き」ました。

自分という人の主人が、自分であることの危うさ、独善的生き方を手放すことは出来ずに、「自分のところ」という永遠の滅び、罪な自分を選び取るという永遠の自滅へと帰って行きました。

「自分に死に人を立てる」、「自我を殺し、喜んで人を自分よりもすぐれた者と思う」、「人の益のために自分を下ろす」、「自分を否定して、他者を尊重する」という御霊の実を結ぶ霊的戦い、人にとって真に実のある戦いに身を投じる生き方よりも、「人をのろってでも稼ぎ」、「人をのろってでも自らの身を立て」、「人をのろってでも自分の正しさを認めさせ表そう」とするお乳ばかりを求めるような何の霊的成長も伴わない戦いに身を投じる生き方を辞めることはありませんでした。

「主のみこころに適わないことを辞める」という聖霊の満たしを、意志をもって求めることはしませんでした。

そんなバラムを評価する言葉が、新約聖書にあります。

ペテロの手紙第二 2 : 1 5 (パウロ)

ユダの手紙 1 1 節 (パウロ)

ヨハネの黙示録 2 : 1 4 (パウロ)

バラムは、せつかくの神の霊の満たし、聖霊の満たしをまるで無かったかのように、「自分のところへと帰って行き」ました。

Part Two

そしてもう一人、民数記 2 4 : 2 5 を見ますと、自分のところに帰って行った人がいます。モアブの王、バラクです。

民数記 2 4 : 2 5 (パウロ)

バラクは、占い師バラムに起こった神体験、聖霊体験、神の言葉、神のお告げ、神のイスラエルへの祝福、そのすべてをまざまざとその目で見、聞き、立ち合い、感情が揺さぶられました。

なのに、バラムと同じく、自分のところへと帰って行きました。

そして何よりも残念なのが、占い師バラムよりも、遥かに祝福の民イスラエル民族に近いところにいて、神の祝福に与る機会、近くにいたのが、このモアブ人の王バラクという人でした。

モアブ人とは、アブラハムの甥ロトの子孫にあたる民族です。

つまり、アブラハムとともにカルデアのウルを出て来て、アブラハムとともに主の祝福の言葉を分かち合い、もっとも信仰の父アブラハムに近い人であり民族だったのが、ロトの子孫モアブ人という方たちでした。

それが、いつのまにか、イスラエルを祝福された万軍の主の祝福の下に遜る代わりに、主の祝福に反する人をのろうことを国家の生業とするようになってしまっていました。

しかも、最も近い親族親類、隣り人、イスラエル民族を呪い殺そうとしていました。

最も近い親類イスラエルの祝福を見て、「キリストを恐れて、互いに従い合う」という選択を選び取る代わりに、「自分に頼り、迷信に縛られて、自らを王としながら、互いに人をのろい合う」という救いのない殺伐とした生き方を選び取って行きました。

そんなモアブ人たちに、むしろ神さまは、のろうという悪い動機でイスラエルに接近して来たにも関わらず、その悪い動機さえも用いて、今一度、イスラエルの民たちと同様に神の祝福の下に立ち返る機会・きっかけを、今ここで与えて下さっているように私の目には映ります。

バラクはバラクなりに、占い師バラムを雇うということを通して、バラムに起こった不思議な神体験、聖霊体験、イスラエルをのろう代わりに祝福の言葉を神の霊に導かれて宣言してしまうバラムの姿を通して、神体験をするのです。

でもなのに、バラクは、自分のところへと帰って行きました。

「自分に死に、聖霊が生きる」、「キリストを恐れ、互いに従い合う」という祝福を選び取って行くことはしませんでした。

霊的盲目から脱する機会を与えられたにも関わらず、それを拒んでしまいました。

このバラムとバラクという二人の人を見ますと、イエス・キリストを信じられるようになっていくこと、イエス・キリストを信じてまことの神を知れるようになっていくこと、聖霊の満たしを求め、「聖霊に満たされたい、聖霊の満たしを神が望んでおられる人との関係に表していきたい」と思っていること自体が、もう既に奇跡なんだ」と思われます。

バラムとバラクと何の違いもない罪人、霊的盲目、生まれながらに御怒りを受けるべき子として生まれて来て、人の作った迷信や、サタン悪霊の誘惑にいくらかでも引かれて行ってしまう性質を未だに持ち合わせている罪多き咎多き者、そんな私が、私たちが、聖霊を与えられ、キリストを信じ、聖霊の満たしを求めながら、キリストを恐れながら、互いに従い合うという生き方を生きたいと思っていること。

これこそ正に、奇跡だと思います。

Conclusion

今日はこの後、聖餐式がありますが、ご自身の引き裂かれた体を表すパンと、流された血を表すぶどう酒を弟子たちに分かち合いながら、「あなたがたもこのように生きなさい」と仰ったイエス様のそのお言葉の温かい意味を、今一度

私たちの心に刻みたいと願います。

そんなキリストを恐れて、互いに従い合うために聖霊の満たしを求める、聖霊の満たしを求めながら、自分に死ぬまことの喜びを味わわせて頂きたいと願います。

「聖霊に満たされなさい。キリストを恐れ、互いに従い合いなさい」というこの御言葉が現れる、私たち土浦めぐみ教会でありたいと願います。
お祈りいたします。

祝祷：「聖霊に満たされなさい。キリストを恐れて、互いに従い合いなさい。」